

日本海沖合から採集されたチョウチョウウオの記録

下光利明^{1,2}・宮原 一¹

Author & Article Info

¹ 国立研究開発法人水産研究・教育機構開発調査センター（横浜市）

TS: shitamitsu_toshiaki42@fra.go.jp (corresponding author)

HM: miyahara_hajime97@fra.go.jp

² 現所属：国立研究開発法人水産研究・教育機構水産資源研究所 底魚第2グループ（八戸市）

Received 14 January 2026

Revised 16 January 2026

Accepted 17 January 2026

Published 18 January 2026

DOI 10.34583/ichthy.63.0_21

Toshiaki Shitamitsu and Hajime Miyahara. 2026. Record of *Chaetodon auripes* (Chaetodontidae) collected from off the Sea of Japan. Ichthy, Natural History of Fishes of Japan, 63: 21–24.

Abstract

In 2019, a single specimen (133.7 mm standard length) of the butterflyfish, *Chaetodon auripes* Jordan and Snyder, 1901, was collected off the Sea of Japan (39°25'N, 136°25'E). This species is distributed in Japan from Aomori Prefecture southwards, but records of it along the Sea of Japan coast are sporadic. At the time of collection, the Tsushima Warm Current was flowing near the collection point, suggesting that presently reported specimen was transported by ocean currents.

チョウチョウウオ科魚類 Chaetodontidae は体が強く側扁し、口が小さく端位、前鰓蓋骨の隅角に棘を欠く特徴をもち、主にサンゴ礁に生息する（池田・中坊、2015）。日本には 8 属 52 種が知られる（本村、2025）。チョウチョウウオ *Chaetodon auripes* Jordan and Snyder, 1901 は朝鮮半島南岸、濟州島、台湾、広東省、海南省、東沙諸島、パラセル諸島、および日本に分布し（島田、2013），日本国内においては津軽海峡以南の日本海沿岸、岩手県、宮城県、茨城県以南の太平洋沿岸および琉球列島や小笠原諸島などの南日本の島嶼域から知られる（島田、2013；木村ほか、2017；吉村ほか、2025）。

2019 年 10 月に、秋田県西方の日本海沖合 (39°25'N, 136°25'E) の海面から本種の成魚が採集された。本個体は沿岸から離れた日本海沖合における標本に基づく初めての記録であるとともに、対馬暖流による南方系魚類の日本海

北部への成魚輸送を示唆するものであるためここに報告する。

材料と方法

計数・計測方法は Pyle and Kosaki (2016) にしたがった。標準体長 (standard length: SL) は本文では体長と表記した。計測はノギスを用いて 0.1 mm 単位 (小数点以下第 2 位を四捨五入) まで行い、計測値は体長に対する百分率で示した。本報告に用いた標本は、神奈川県立生命の星・地球博物館の魚類資料 (KPM-NI 60450) に保管されている。また、鮮時および固定後のカラー写真は同博物館の魚類写真資料データベース (KPM-NR 268162) に登録されている。

Chaetodon auripes Jordan and Snyder, 1901

チョウチョウウオ

(Fig. 1; Table 1)

標本 KPM-NI 60450, 体長 133.7 mm, 日本海沖合 (39°25'N, 136°25'E), たも網, 2019 年 10 月 19 日, 城下勝雄。

記載 計数形質と体各部の体長に対する割合を Table 1 に示した。体は正円形に側扁する。体高は体長の 66.3% と高い。吻は尖り、吻長は体長の 10.9%。頭部背縁の輪郭は眼の前方で凹み、両眼間隔部から背鰭起部にかけて著しく上昇する。背鰭基底部の体背縁は、背鰭第 8 棘基部にかけて緩やかに上昇し、そこから最後軟条基部にかけて弧状に下降する。体腹縁は下顎先端から腹鰭起部まで著しく下降し、そこから臀鰭起部まで緩やかに下降する。臀鰭起部から最後軟条基部にかけて弧状に上昇する。尾柄は後方に向かって徐々に低くなり、尾鰭基底直前で高くなる。口は小さく端位。鼻孔は 2 対で、眼窓前縁の前方に位置し、ともに近い。前鰓蓋骨の後腹部縁辺は平滑で、涙骨と眼下骨の縁辺は滑らか。背鰭起部は鰓孔上端直上に位置する。背鰭棘部の基底長は、背鰭軟条部基底長より長い。背鰭基底後端は、臀鰭基底後端のやや後方に位置する。背鰭は、第 1 棘が最も短く、第 6 棘が最も長い。背鰭棘部の鰭膜は、



Fig. 1. Fresh specimen of *Chaetodon auripes* from off the Sea of Japan (KPM-NI 60450, 133.7 mm SL).

前方の棘の間のものほどよく湾入する。背鰭軟条は伸長せず輪郭は丸みを帯び、第16軟条付近で最も高い。臀鰭基部は背鰭の最後棘基底直下よりやや前方に位置する。臀鰭は、第1棘が最も短く、第2棘が最も長い。臀鰭棘部の鱗膜は、前方のものほどよく湾入する。臀鰭軟条は伸長せず輪郭は丸みを帯び、第12軟条付近で最も高い。胸鰭基底前端は鰓蓋後端のわずか後方で、背鰭第3棘基部の直下。腹鰭基底前端は、胸鰭基底前端のわずか後方に位置する。尾鰭は截形で、その後端はやや膨らむ。側線は不完全で背側に弧を描き、背鰭第20軟条基底下付近で終わる。

色彩 生鮮時の色彩 (Fig. 1) 一体の地色は黄色。体側の全体には茶褐色の縦線が多数走る。項部より眼を通り間鰓蓋骨下端に至る横帶は黒色で太く、背面では左右が繋がるが、腹側では離れる。横帶の前方は眼の前縁から腹側にかけては細く、後方は項部わずか下方から腹側にかけて幅広く白色に縁どられる。吻部は灰白色で、上唇は黒色を呈する。虹彩と瞳孔は黒色。背鰭第1-2棘は暗褐色で、棘間の鱗膜は黄色。背鰭第3-12棘は、後方に接する鱗膜上部

から前方の湾入部にかけて暗褐色。背鰭軟条は茶褐色を呈し、第1-21軟条にかけて黄色に縁どられ、さらに外側の外縁部は暗褐色。臀鰭第1-2棘と第3棘先端部は茶褐色、棘間の鱗膜は黄色で、茶褐色に縁どられる。腹鰭は一様に黄色。臀鰭軟条は茶褐色を呈し、第1-16軟条にかけて黄色に縁どられ、さらに外側の外縁部は暗褐色。臀鰭棘は明るい茶褐色。胸鰭は透明。尾鰭は基部が山吹色で、暗褐色、白色の順に縁どられる。尾鰭外縁部は白みがかかった半透明。

固定後の色彩 — 生鮮時に黄色であった体の地色は黄色味がかった白色。背鰭第1-21軟条にかけてと、臀鰭第1-16軟条にかけての黄色の縁どりは白色に変色する。背鰭と臀鰭の外縁部は黒色。胸鰭基底部、尾鰭基底部および腹鰭は、ごく淡い黄色味がかった白色。

分布 本種は朝鮮半島南岸、済州島、台湾、広東省、海南省、東沙諸島、パラセル諸島、および日本に分布する (島田, 2013)。日本国内では、津軽海峡から九州西岸の対馬暖流沿岸と茨城県から九州南岸の太平洋沿岸に分布し、伊予灘、伊豆諸島、小笠原諸島、北硫黄島、岩手県、宮城県、

屋久島、口永良部島、琉球列島、南大東島、および尖閣諸島などからの記録がある（島田、2013；木村ほか、2017；吉村ほか、2025）。

備考 本標本は背鰭が12棘、臀鰭が3棘、側線が背鰭最後部付近で終わる、背鰭中央が著しく高くない、背鰭軟条が伸長しない、体側に顕著な暗色斑や白色斑がない、眼から頭部腹面に達する暗色横帯がある、吻が尖る、尾柄部に顕著な斑紋がない、体側に多数の暗色縦線があるなどの特徴が、島田（2013）が示した *C. auripes* の特徴とよく一致したため本種に同定された。

本標本は漂流物に随伴しておらず、夜間に海面を単独で体を横たえた状態で漂っているところをたも網で採集された。日置・松永（2003）は、本邦太平洋沿岸におけるチョウチョウウオ科魚類の出現種数が千葉県と茨城県の間で急減することから、本科魚類で比較的低水温に耐えることができる種の水温耐性をおよそ 12°C と推測している。本標

Table 1. Counts and measurements of *Chaetodon auripes* from off the Sea of Japan.

KPM-NI 60450	
Standard length (SL; mm)	133.7
Morphometrics (% of SL)	
Head length	32.2
Body depth	66.3
Body width	17.0
Snout length	10.9
Predorsal length	43.5
Preanal length	69.2
Dorsal-fin base length	73.8
Anal-fin base length	39.6
Orbit diameter	8.8
Interorbital width	11.2
Caudal-peduncle depth	14.6
Pelvic-fin spine length	14.3
1st pelvic-fin soft ray length	23.6
1st dorsal-fin spine length	5.8
2nd dorsal-fin spine length	8.3
3rd dorsal-fin spine length	12.8
4th dorsal-fin spine length	15.0
5th dorsal-fin spine length	16.4
Last dorsal-fin spine length	13.5
Longest dorsal-fin soft ray length	17.3
1st anal-fin spine length	9.6
2nd anal-fin spine length	14.5
3rd anal-fin spine length	14.4
Longest anal-fin soft ray length	16.5
Caudal-fin length	20.1
Pectoral-fin length	27.9
Meristics	
Dorsal-fin rays	XII, 22
Anal-fin rays	III, 17
Pectoral-fin rays	16
Caudal-fin rays	22
Pored lateral-line scales	36
Dorsal scale rows	8
Ventral scale rows	13
Gill rakers on 1st arch	6 + 15 = 21

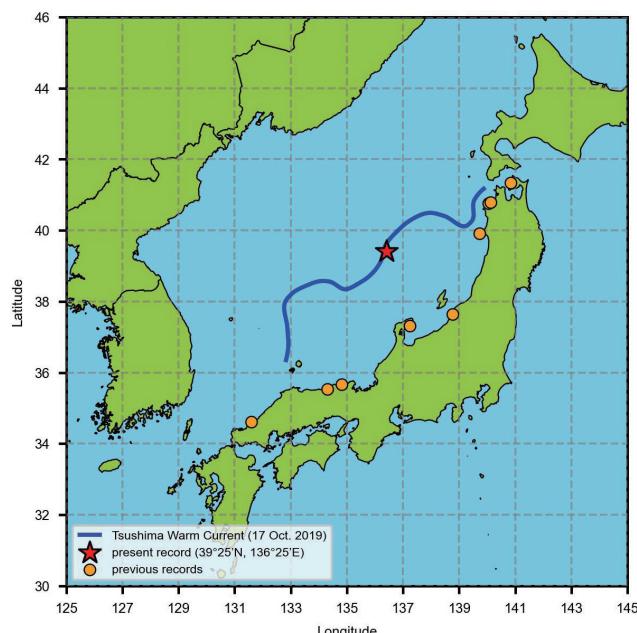


Fig. 2. Map showing collection site of *Chaetodon auripes* (KPM-NI 60450) as of 19 October 2019 and the presumed flow path of the Tsushima Warm Current as of 17 October 2019. The flow path was drawn based on data downloaded from [URL](#).

本の採集時の表面水温は 20.3°C で、前日 16 時の 39°20'N, 136°25'E における CTD 観測では、水深 53 m まで 20.0°C を超えていたことから、本種が活動するうえで許容可能な水温であったと考えられる。また海洋速報によると（海上保安庁、2019），10月 17 日における採集地点は対馬暖流の流路付近であった (Fig. 2)。

沿岸性魚類である本種は、日本海では津軽海峡以南の沿岸に分布するとされているものの（島田、2013），その記録は青森県、秋田県、新潟県、石川県、兵庫県、鳥取県および山口県と地理的に不連続である（河野ほか、2014；和田ほか、2014；園山ほか、2020）(Fig. 2)。また、新潟県寺泊産の標本は全長 150 mm（本間ほか、1997），神奈川県立生命の星・地球博物館に収蔵されていた秋田県男鹿産の標本（KPM-NI 23518）は体長 126 mm，そして本種の北限記録である青森県牛滝産の標本は全長 165 mm であり（野村・塙垣、1992），新潟県以北からは今回得られた標本に近いサイズの個体の記録が目立つ。海流による成魚の輸送について、鹿児島県薩摩半島から相模湾にかけての九州・四国・本州の黒潮流域沿岸からは、黒潮による輸送の結果と考えられるさまざまな熱帶性魚類の成魚の出現が報告されている（例えば、荻原ほか、2010；伊東ほか、2011；瀬能ほか、2013；松沼ほか、2015）。これに加え、岩手県宮古市におけるサザナミトサカハギ *Naso vlamingii* (Valenciennes, 1835)（野村ほか、2021）といった、北東北の太平洋岸を中心に対馬暖流の輸送によるものと考えられる同様の報告もみられる。本標本は沿岸域から離れた日本

海の沖合で採集されたこと、採集地点が対馬暖流の流路近傍であったことから、日本海南西部方面からの対馬暖流による成魚輸送の途上であった可能性が示唆される。

謝 辞

本報告を取りまとめるにあたり、第五十八長功丸の坂下由男漁撈長（当時）と城下勝雄船長（当時）には標本採集に多大なご協力をいたいた。ここに記して深く御礼申し上げる。本標本は、国立研究開発法人水産研究・教育機構開発調査センターが実施した令和元年度海洋水産資源開発事業<いか釣：北太平洋および日本周辺海域>において得られた。

引用文献

- 日置勝三・松永正光. 2003. 本邦太平洋及び東シナ海沿岸におけるチョウチョウウオ科魚類の分布. 海・人・自然 (東海大学博物館研究報告), 5: 37–42.
- 本間義治・青柳 彰・板野英彬・中村幸弘・箕輪一博・北見健彦・矢部英生. 1997. 新潟県魚類目録補訂(XIV). 柏崎市立博物館報, 11: 95–112.
- 池田博美・中坊徹次. 2015. 南太平洋沿岸の魚類. 東海大学出版部, 秦野. 597 pp.
- 伊東正英・松沼瑞樹・岩坪洋樹・本村浩之. 2011. 鹿児島県笠沙沿岸から得られたアイゴ科魚類ゴマアイゴ *Siganus guttatus* の北限記録. Nature of Kagoshima, 37: 161–164.
- 海上保安庁. 2019. 海洋速報・海流推測図. [URL](#) (11 Nov. 2025)
- 木村祐貴・日比野友亮・三木涼平・峯苦 健・小枝圭太 (編). 2017. 緑の火山島 口永良部島の魚類. 鹿児島大学総合博物館, 鹿児島. 200 pp.
- 河野光久・三宅博哉・星野 昇・伊藤欣吾・山中智之・甲本亮太・忠鉢孝明・安澤 弥・池田 怜・大慶則之・木下仁徳・児玉晃治・手賀太郎・山崎 淳・森 俊郎・長濱達章・大谷徹也・山田英明・村山達朗・安藤朗彦・甲斐修也・土井啓行・杉山秀樹・飯田新二・舟木信一. 2014. 日本海産魚類目録. 山口県水産研究センター研究報告, 11: 1–30.
- 松沼瑞樹・桜井 雄・本村浩之. 2015. 琉球列島から得られたニザダイ科魚類シノビテングハギ *Naso tergus* の記録. Nature of Kagoshima, 41: 149–152.
- 本村浩之. 2026. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準名と学名. Online ver. 36. [URL](#)
- 野村玲偉・富森祐樹・甲斐嘉晃・松沼瑞樹. 2021. 岩手県宮古市から得られたニザダイ科サザナミトサカハギの北限記録. Ichthy, Natural History of Fishes Japan, 6: 51–53.
- 野村義勝・塩垣 優. 1992. 下北半島牛滝産魚類目録補訂—I. 青森県水産増殖センター研究報告, 7: 1–7, pls. 1–7.
- 荻原豪太・吉田朋弘・伊東正英・山下真弘・桜井 雄・本村浩之. 2010. 鹿児島県笠沙沖から得られたカンムリブダイ *Bolbometopon muricatum* (ベラ亜目: ブダイ科) の記録. Nature of Kagoshima, 36: 43–47.
- Pyle, R. L. and R. K. Kosaki. 2016. *Prognathodes basabei*, a new species of butterflyfish (Perciformes, Chaetodontidae) from the Hawaiian Archipelago. ZooKeys, 614: 137–152.
- 瀬能 宏・御宿昭彦・伊東正英・本村浩之. 2013. 日本初記録のニザダイ科テングハギ属の稀種マサカリテングハギ(新称)とその分布特性. 神奈川県立博物館研究報告(自然科学), 42: 91–96.
- 島田和彦. 2013. チョウチョウウオ科, pp. 990–1005, 2022–2025. 中坊徹次 (編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 園山貴之・荻本啓介・堀 成夫・内田喜隆・河野光久. 2020. 証拠標本および画像に基づく山口県日本海産魚類目録. 鹿児島大学総合研究博物館研究報告, 11: 1–152.
- 和田年史・原口展子・山崎英治. 2014. 日本海南西部鳥取県浦富海岸における浅海魚類相および出現魚類の季節的消長. 鳥取県立博物館研究報告, 51: 43–58.
- 吉村健司・大土直哉・青山 潤. 2025. 岩手県大槌湾・船越湾の定置網で得られた岩手県初記録4種を含む暖水性魚類9種の記録. Ichthy, Natural History of Fishes Japan, 60: 36–40.